

**J** **apanese text**

2016年 春/夏号 日本語編

体験

**動く・動かすミュージアム**

写真・動画=八田政玄  
文=白坂ゆり・編集部

p.046

昨今急速に増えつつある体感型ミュージアム。一定の距離をとって「見る」ことがメインだった展示が、触る・感じる・考える方向へと転換しつつある。今回はなかでも特徴のある観客主体のミュージアムを、厳選して18トピックス紹介。また同時に、静止画だけでは伝えづらい展示の魅力を、なんと動画にして連動公開している。QRコードを読み取り、気になったミュージアムを今すぐ体感してみよう。

岩井俊雄《マッシュマロスコープ》2002年。NTT インターコミュニケーション・センター (ICC)。この物体の前を通るとビデオ撮影され、モニターをのぞくと、時間が行きつ戻りつするように再生される。

**オービィ横浜**

p.047

**大自然に飲み込まれる・超地球体感ミュージアム**

日本が世界に誇るアミューズメント会社 SEGA と、ネイチャードキュメンタリー映像で世界一の規模と歴史をもつ BBC Earth が手を組んだ。そのミュージアムはたとえば、幅 40m もの巨大スクリーンに迫力の映像が投影される、だけではない。ここでしか見られないオリジナルのストーリーに合わせ、振動、風、光、果ては匂いまでもが演出され、360 度の立体音響とともに、身体ごと飲み込まれるような感覚を味わえる。あるいは夜ともなると -15 ~ -20℃にも冷え込むというケニアの意外な極寒の世界を、肌で感じるができる。そうかと思えば最先端のフォトシステムで、自分がさまざまな動物に変身したり、1 秒間にどれだけ身体を動かせるかを、

動物たちと競ったりもできる。ある意味で、動物園よりも身近に動物を、ひいては地球を体感できる場所。大陸はもちろん空や海底、さらにはジャングルから極寒帯まで、一瞬にしてワープできる装置ともいえよう。

2013 年夏に横浜で初めてお目見えした Orbi は、今年 1 月には大阪でもオープン。今後は海外への展開も考えているという。あなたの街でも、超地球体験をできるようにする日も遠くないかもしれない。

[www.youtube.com/watch?v=LGBA2jEfqhQ](http://www.youtube.com/watch?v=LGBA2jEfqhQ)

※ QR コードは (株) デンソーウェブの登録商標です。携帯電話やタブレットのカメラで URL を読み取ってアクセスしてください。使用できない場合は、上記 URL を打ち込むか、KJE ウェブページをご覧ください。

(左)  
大自然マッピング「ベースキャンブ」(上)では、白い大きなブロックに、ジャングルや氷の世界、火山のマグマなどの映像が刻々と映し出され、臨場感たっぷり。中央の菌状のオブジェには、揚げ羽蝶の幼虫やライオンなどが投影され、人の動きに反応する。

(右)  
海中散歩「ブルーレイヤー」(左上)では、幅 12m のスクリーンを舞台に、浅瀬から深海までをゆっくりと潜っていく感覚が楽しめる。光の波に揺られているだけでも安らぐ不思議な空間だ。「アニマルセルフイー」(右下・右)では、自分の姿と CG の合成によってさまざまな動物に変身可能。気に入った画像は写真にして購入することもできる。ほかにもアフリカゾウの群れと一緒に旅する映像体験「エレファンツ」など、多彩なコンテンツが楽しめる。

**オービィ横浜**  
神奈川県横浜市西区みなとみらい 3-5-1  
MARK IS みなとみらい 5F  
Tel. 045-319-6543  
[orbiearth.jp](http://orbiearth.jp)

**オービィ大阪**  
大阪府吹田市千里万博公園 2-1 EXPOCITY  
Tel. 06-6155-7299

## 東京都現代美術館

p.048

### 多様なアート体験であなたを変える現代美術館

日本随一の現代美術の専門館、東京都現代美術館。観客の身体に訴えかけるインスタレーションや、観客の参加を促すプロジェクト型作品など、体験型アートも実に多種多様だ。企画展のほかに常設展示室では、約 4800 点の所蔵品の中から毎回 100 点程度の国内外の作品を選び、多角的な視点から戦後・現代美術を紹介する「MOT コレクション」を開催している。

3月5日からの「コレクション・オンゴーイング」では、大友良英＋青山泰知＋伊藤隆之によるインスタレーション《without records-mot ver. 2015》に注目したい。開館 20 周年にあたる 2015 年に同館のために制作され、收藏された作品だ。レコードは存在せず、プレーヤーそのものがランダムに音を発し、共鳴する“音楽の森”を歩こう。また、宮島達男《それは変化し続ける それはあらゆるものとの関係を結ぶ それは永遠に続く》は、1998 年、コミッションワークとして收藏された常設作品。それは 1 から 9 までの赤い光を放ち、静かにカウントしながら点滅する、いわば“時の海”。近づいて見るとその点滅速度がそれぞれ異なることに気づく。それは個々の人生にも似て、訪れるたびに感慨深い。

本展終了の 5 月 30 日以降は、大規模改修工事に伴い、長期にわたり休館となる。その前に日本の現代美術にぜひ触れてほしい。

[www.youtube.com/watch?v=QJpXDntPUFU](http://www.youtube.com/watch?v=QJpXDntPUFU)

(左)

常設展示室のアトリウムに広がる、大友良英＋青山泰知＋伊藤隆之《without records - mot ver. 2015》2015 年。ワークショップによって金属やプラスチック、ゴムなどで加工が施された 92 台のレコードプレーヤーがそれぞれに音を奏でる。再生のたびに組み合わせが変化し、二度と同じ「曲」は再現されない。

(中央)

常設展示室の入り口で待ち受けるのは、文明批評的な動く巨大ロボット彫刻で知られるヤノベケンジの《ロッキング・マンモス》2005 年。マンモスは自らの廃車を解体して制作された。上にまたがっているのは《M・ザ・ナイト》2006 年。展示では触れないが、マンモスは鼻の部分が動く。

(右)

国際的に活躍する宮島達男の《それは変化し続ける それはあらゆるものとの関係を結ぶ それは永遠に続く》1998 年。無数のデジタルカウンターが、それぞれの速度で 1 から 9 までを数えた後、0 の代わりに闇が表示され、また 1 から数え始める。見る者に「生と死」などを想起させる。

#### 東京都現代美術館

東京都江東区三好 4-1-1

[www.mot-art-museum.jp](http://www.mot-art-museum.jp)

3月5日～5月29日「MOT コレクション コレクション・オンゴーイング」。戦後美術を中心に展示。若手作家の新しい動向を紹介する「MOT アニュアル 2016 キセイノセイキ」、「スタジオ設立 30 周年 ピクサー展」も同時開催。5月30日から休館。詳細はホームページを参照。

## 日本科学未来館

p.049

### 最先端科学技術を目の当たりに

日本科学未来館は、科学者で宇宙飛行士の毛利 衛さんが館長を務める大型ミュージアム。いま世界で起きていることをターゲットとした展示が、5 階まであるフロアに所狭しと配置されている。そのジャンルは地球や宇宙はもちろん、医療や生命の不思議、情報化社会、ロボットなどの最新テクノロジーまで幅広い。なかでも人気を集めているのが 3 階に展示されているアンドロイドのゾーン。既に人間と見紛うばかりのなめらかな皮膚や可動性を手に入れたアンドロイドたち。人を人たらしめるものは何なのか、考えるきっかけになる展示である。

もうひとつ、開館以来の人気展示は吹き抜けの天井からぶ

ら下がる重さ 13t もの地球型ディスプレイ「Geo-Cosmos」。「宇宙から見た輝く地球の姿を多くの人と共有したい」との館長の思いが形になった展示で、気象衛星が撮影した過去 30 日分のリアルな雲の動きを、ソファに寝転びながらゆったりと眺めることができる。

また今春は 15 周年の節目として、館内の常設展示を大幅リニューアル。4 月 20 日～ 24 日までは、それを記念して常設展入場とドームシアターの鑑賞が無料となる。この機会にぜひ足を運んでみてほしい。

[www.youtube.com/watch?v=2oztv234uNY](http://www.youtube.com/watch?v=2oztv234uNY)

(左)

「テレノイド」(左)は、「必要最小限の人間らしさ」を形にしたアンドロイド。あらゆる特徴を排除した結果、孫から恋人まで、さまざまな相手をイメージして会話できるようになったという。「コードロイド」(下)は、少女の形をしたアンドロイドが、子どもの声など複数の声色でさまざまなニュースをランダムに読み上げるアートな作品。子どもの声を通して聞く社会のニュースは、普段とはまた違って聞こえるのが不思議だ。

(右)

「オトナロイド」(中央・右上)は、成人女性の姿をしたアンドロイド。至近距離で対話をしたり、逆に操作する側にまわってアンドロイドに乗り移るような体験をすることが可能。自分が話す声に合わせて、アンドロイドが唇はもちろん首や視線を動かす様に、驚愕すること間違いなし。一方、ヒューマノイドロボット「ASIMO」(右下)は、2000 年の発表以来、今日まで地道に新化を重ね、現在ではサッカーボールを蹴る、ジャンプをするなどの動きも可能に。一日約 3 回のデモンストレーションは、人だかりができる人気だ。

#### 日本科学未来館

東京都江東区青海 2-3-6

Tel. 03-3570-9151

[www.miraikan.jst.go.jp](http://www.miraikan.jst.go.jp)

3 月 2 日～ 5 月 30 日までは企画展「GAME ON ～ゲームってなんでおもしろい?」、7 月 2 日～ 10 月 10 日までは企画展「The NINJA 一忍者ってナンジャ!?」を開催予定。忍術に対する科学的なアプローチと、現代を生き抜くサバイバル術への転換が期待できる。

## NTT インターコミュニケーション・センター (ICC)

p.050

### 情報化社会に風穴を開けるメディアアートの専門館

20 世紀以降の世界を大きく変えたデジタル・テクノロジー。その多くは効率化や最適化を目的としているが、芸術と科学が融合するメディアアートは、最先端技術ばかりでなく古いメディアを再利用したり、エラーを生かしたりと、価値を転換する。NTT インターコミュニケーション・センター (ICC) は、そのような多様なインタラクティブ (双方向) アートが体験できるメディアアートの専門館だ。

有料の企画展とともに、国内外の代表作や新作、歴史的な作品などを入場無料で長期展示する「オープン・スペース」を開催。観客の動きに反応する装置型の作品、ノイズで音楽を奏でるサウンドアート、ウェブ上で世界中から参加できる作品など、年度ごとに変わるその内容は多彩だ。

5 月中旬から始まる「オープン・スペース 2016」では、2015 年度に引き続き、岩井俊雄によるマシュマロのような形をした 2 作品を展示予定。モニター内の世界が、現実界の時間の流れとは違って見える。ビデオカメラで撮影された映像がコンピュータに貯えられ、《マシュマロモニター》では、映像を再生するタイミングを断片ごとにずらすことで、動く鑑賞者の身体が変形されて映り、《マシュマロスコープ》(p.46)では早送りや巻き戻し、点滅が起こる。また、1997 年の開館当初から常設されている《ジャグラー》は、パラパラマンガと同じ仕組みの作品。アニメーションや映画の起源を思い起こさせる。

国際展でも評価の高い日本のメディアアートを知ることにもできる。新しいメディアに対する感性や、柔軟なコミュニケーション能力を養う機会にもなる。

[www.youtube.com/watch?v=-C4I\\_vf-IBA](http://www.youtube.com/watch?v=-C4I_vf-IBA)

(上)

岩井俊雄《マシュマロモニター》2002 年。モニターを見ながら何かアクションしてみよう。モニター内の自分の身体が波打ち、ギザギザに変

形したり、水平の細いブロックに分断されてズレたりする。背景にある静止物は変形せず、動くものだけが変化する。

(下)

グレゴリー・バーサミアン《ジャグラー》1997年。柱の周りに設置された少しずつ形の異なる人形が、高速で回転。そこに高速で点滅する光を当てると、ジャグリングしているように見える。投げられた電話が哺乳瓶になり、ミルクがこぼれ……。

#### NTT インターコミュニケーション・センター (ICC)

東京都新宿区西新宿 3-20-2 東京オペラシティタワー 4F

[www.ntticc.or.jp](http://www.ntticc.or.jp)

3月6日まで「オープン・スペース 2015」。3月7日から休館。展示替えされ、5月中旬から「オープン・スペース 2016」を開催予定。

## 鉄道博物館

p.051

### 過去・現在の電車を見て・乗って・運転できる

開設9年目を迎える鉄道博物館は、東日本鉄道文化財団が運営する巨大な体感ミュージアム。1階には鉄道創世期から国内で活躍した鉄道車両の実物36両が展示され、撮影はもちろん、触れたり乗ったりが可能な車両も。シミュレーターホールでは、運転台に座っての擬似運転体験が可能。3階ビューデッキでは、博物館の脇を走る新幹線を同じ目線から眺められる。館内限定のお土産も洒落たものが揃い、旅行気分が楽しめる。意外と知らない電車の仕組み。ぜひこの機会に学んでみたい。

[www.youtube.com/watch?v=DEt7b5pwywQ](http://www.youtube.com/watch?v=DEt7b5pwywQ)

中央の転車台には蒸気機関車が載せられ、一日に2回、回転しながら汽笛を鳴らす(右・動画参照)。その周囲には歴史に名を残す名車両の数々。上は、戦前の鉄道黄金期に造られた特急「富士」の展望車。外国人観光客をターゲットにした桃山調の装飾がきらびやかである。

#### 鉄道博物館

埼玉県さいたま市大宮区大成町 3-47

Tel. 048-651-0088

[www.railway-museum.jp](http://www.railway-museum.jp)

6月26日まで、北海道新幹線開業記念の企画展「海を航る」も開催。東京から北海道を結ぶ鉄道の歴史を振り返る。

## 原鉄道模型博物館

### 鉄道模型の神が作り上げたミュージアム

「原 信太郎」、鉄道模型に少しでも興味があれば、誰でもピンとくる名前だという。2014年に95歳でこの世を去るまで、生涯6000両の鉄道模型を製作・収集。ほかに類を見ないほど「本物と同じに走る」ことに重きを置き、通常は合金で作られる模型用車輪を、本物同様に鉄で作り直し、架線から集電して走る走行システムも構築。車両の揺れまで抑制し、模型にもかかわらず、快適な乗り心地を追求した。一日に30名、実際の鉄道運転台を使った模型運転体験も可能。鉄道に詳しくなくとも、その鉄道愛に圧倒されるミュージアムである。

[www.youtube.com/watch?v=44FLTtw\\_BLU](http://www.youtube.com/watch?v=44FLTtw_BLU)

博物館の目玉「いちばんテツモパークジオラマ」(上)。310㎡という広大な敷地を、1/32サイズの列車約100両が駆け巡る。レンタルのオペラグラスを活用して、500名を超える人物のミニチュアとともに眺めたい。そのほかの展示室(右)は、まるで豪華客車のように。壁一面にプリントされた原氏の自宅工房写真も見所のひとつ。

#### 原鉄道模型博物館

神奈川県横浜市西区高島 1-1-2 横浜三井ビルディング 2F

Tel. 03-5927-9578 (LaLaport Agency Co., Ltd. Call Center)

[www.hara-mrm.com/english](http://www.hara-mrm.com/english)

原鉄道模型博物館の入館券を5組10名様にプレゼント!

詳しくは p.89 をご覧ください。

## 山口情報芸術センター [YCAM]

p.052

### テクノロジーとコラボレーションで人をアクティブに

メディア・テクノロジーを用いた新しい表現を探求する山口情報芸術センター[YCAM]。なかでも、YCAMの研究開発チーム「YCAM InterLab」と市民や専門家のコラボ「R&D（研究開発：Research & Development）プロジェクト」に注目したい。たとえば、ザ・フォーサイス・カンパニーのダンサー安藤洋子、日米のプログラマーらとのプロジェクト「Reactor for Awareness in Motion (RAM)」では、ダンス創作と教育のためのツールを開発。モーション・キャプチャー・システムを用いてアニメーション表示された自分と相手の動きを確かめながら、身体表現を研ぎ澄ますことができる。ほかにも展覧会やワークショップ、公演なども行われている。

[www.youtube.com/watch?v=XAXUoITVjVY](http://www.youtube.com/watch?v=XAXUoITVjVY)

下：Reactor for Awareness in Motion (RAM) から発展したダンス公演「Dividual Plays—身体は無意識とシステムとの対話」2015年。

左下・中央：子どもが主体となり、メディアを使った遊びを考えてつくる半屋外公園「コロガルパビリオン」2013~2014年。

右下：Rhizomatiks Research + ELEVENPLAY「border」2015年（スパイラルホール）。新作ダンス公演をYCAMでも開催。

©photo by Muryo Homma (Rhizomatiks Research)

すべて写真提供＝山口情報芸術センター [YCAM]

#### 山口情報芸術センター [YCAM]

山口市中園町 7-7

[www.ycam.jp](http://www.ycam.jp)

3月5日～5月8日、「border Installation ver. 展」。2月に上演されたRhizomatiks Research + ELEVENPLAYの新作ダンス公演「border」をインスタレーションとして展示する。

ほか展覧会・イベントなど多数開催。

## 魔法の美術館

### あなたの街にもやってくる、光と遊ぶアート

太陽光によるエネルギーをため、歩いたり触れたりすると石が光る《the blink stone》。鑑賞者の身体がピクセルで表され、近づいたり離れたりすると、ピクセルの大きさが変化する《Pixelman》。国内外で活躍するメディアアーティストやサウンドデザイナーらによる、デジタル・テクノロジーを駆使した光と影と音のアート。手をかざすと光が波紋のように広がる作品など、子どもも大人もいつの間にか夢中になってしまう。全国を巡回し続けている人気展だ。

[www.youtube.com/watch?v=rrQiWdtASBA](http://www.youtube.com/watch?v=rrQiWdtASBA)

上：岡田憲一＋冷水久仁江 (LENS)《Pixelman》©kenichi OKADA+kunie HIYAMIZU(LENS)

右：far east method（首藤圭介／金箱淳一）《the blink stone》©far east method

3月27日まで 佐倉市立美術館

3月4日～4月10日 岡山ステイミュージアム

3月26日～5月22日 富岡市立美術博物館・福沢一郎記念美術館

4月23日～5月15日 静岡市清水文化会館（マリナート）

6月25日～9月19日 熊本市現代美術館

7月2日～9月4日 釧路市立美術館

7月12日～8月28日 東郷青児記念 損保ジャパン日本興亜美術館

7月16日～8月21日 鹿児島県歴史資料センター黎明館

## 瀬戸内国際芸術祭 2016

p.053

### 3年に1回の国際展。旅こそが変化するアート

「海の復権」をテーマに、3回目の開催となる「瀬戸内国際芸術祭 2016」では200点を超えるアートを公開。動きのあ

る体験型作品も数多い。小豆島で2013年に制作された水神《アンガー・フロム・ザ・ボトム》が水を噴き出す姿にも出会えるかもしれない。豊島に2010年に開設された《心臓音のアーカイブ》もおすすめだ。心臓音の鼓動に合わせて電球が明滅するインスタレーションや、人々の心臓音を聴く部屋、心臓音を採録する部屋からなる、「祈りの場」ともいえる作品だ。作者のボルタンスキーは今回、新作も発表する。  
[www.youtube.com/watch?v=2q\\_wvnNNIFs](http://www.youtube.com/watch?v=2q_wvnNNIFs) (動画は2013年のもの)

左上：クリスチャン・ボルタンスキー《心臓音のアーカイブ》写真＝久家靖秀

左下：ビートたけし×ヤノベケンジ《アンガー・フロム・ザ・ボトム》は、2013年の芸術祭終了後に建築集団「ドットアーキテツ」によって社が作られ「美井戸神社」となった。起動する日時はホームページを参照。写真＝増田好郎

#### 瀬戸内国際芸術祭 2016

春：3月20日～4月17日

夏：7月18日～9月4日

秋：10月8日～11月6日

直島、豊島、小豆島など瀬戸内海の12の島と高松港・宇野港周辺

[setouchi-artfest.jp](http://setouchi-artfest.jp)

《心臓音のアーカイブ》は、瀬戸内国際芸術祭の会期以外も公開。詳細はベネッセアートサイト直島のウェブサイト参照。

[benesse-artsite.jp/en/art/boltanski.html](http://benesse-artsite.jp/en/art/boltanski.html)

## チームラボアイランド

### 踊る!美術館と、学ぶ!未来の遊園地

#### 最先端のデジタルアートが生み出すもうひとつの世界

デジタル社会のさまざまな分野のスペシャリストからなるウルトラテクノロジスト集団「チームラボ」。彼らのアート作品とデジタル知育空間が体験できる展覧会が開かれる。《花と人、コントロールできないけれども、共に生きる - A Whole Year per Hour》では、コンピュータプログラムによってリア

ルタイムで花々が描画されて壁や床に映し出される。花々は鑑賞者の動きの影響を受けて変容し続け、咲きわたったりしながら、同じ姿を二度と見せることはない。《花と屍 剥落》では、日本美術をモチーフとした12幅の絵物語が動く。

[www.youtube.com/watch?v=ly-KbPYK83A](http://www.youtube.com/watch?v=ly-KbPYK83A)

上・左下：《花と屍 剥落》十二幅対

左上：《花と人、コントロールできないけれども、共に生きる - A Whole Year per Hour》

すべて写真提供＝チームラボ

#### チームラボアイランド 踊る!美術館と、学ぶ!未来の遊園地

3月12日～6月6日

ひらかたパーク

大阪府枚方市枚方公園町1-1

[exhibition.team-lab.net/hirakata](http://exhibition.team-lab.net/hirakata)

## NIFREL (ニフレル)

### 感性「にふれる」生きているミュージアム

2015年11月、世界最大級の水族館「海遊館」が、まったく新しいスタイルのミュージアムを誕生させた。水族館に動物園、さらには美術館をも融合させ、魚はもちろん、哺乳類や鳥類など約150種、2000点を超える生き物を、独自のアーティスティックなアプローチで紹介している。生き物の色だけに注目させるゾーンや、姿の美しさで魅せるゾーン、立体映像シアターなどを通じ、わかったつもりでいる生き物の不思議にはっとさせられる。ミュージアムの新体験である。

[www.youtube.com/watch?v=YZ7Pm5wLr9A](http://www.youtube.com/watch?v=YZ7Pm5wLr9A)

上：1階の「わざにふれる」ゾーンでは、水を噴く、まわりと同じ色に変化するなどの「わざ」を間近に見られるよう、水槽も工夫。

左下：アーティスト松尾高弘(まつお・たかひろ)さんによって自然現象の美しい瞬間を切り取った映像と音楽が、光と融合する「WONDER

MOMENTS」。

右下:2階の「うごきにふれる」ゾーンで、自由に泳ぎまわるアメリカンバー。

#### NIFREL

大阪府吹田市千里万博公園 2-1 EXPOCITY

Tel. 0570-022060 (ナビダイヤル)

www.nifrel.jp

## さらなるオススメ7選! 全国の体感型ミュージアム

p.054

国内にはまだまだおもしろい、触れて・感じて・考える体感型ミュージアムが、たくさんある。ここでは全国津々浦々のミュージアムを行脚し、今回の特集の監修もしてくれたアーティストの白坂ゆりさんが、とくにオススメする個性的なミュージアム7館を厳選して紹介する。やや不便な場所に位置するものもあるが、それだけの価値はある。日本の新しい側面、自分の新しい一面が見られること間違いなしだ。

### ● 現美新幹線

#### 新幹線車両がギャラリーになる「走る美術館」

今春、旅をしながらアート鑑賞できる「現美新幹線」が上越新幹線でデビューする。車両の側面部分には、写真家で映画監督の蜷川実花の撮影による、長岡花火大会の花火の写真があしらわれる。車内は、荒神明香、石川直樹ら7組のアーティストの作品が全6両に展示される。

2016年春より土曜・日曜・祝日を中心に、上越新幹線の越後湯沢～新潟間を運行予定。

www.jreast.co.jp/genbi

(写真)

© mika ninagawa, Courtesy of Tomio Koyama Gallery.

### ● 十和田市現代美術館

#### 複数の異なる空間型作品と野外彫刻が続く美術館

33組のアーティストが美術館のために制作した38作品が、西沢立衛建築による複数の箱のような空間や庭などに常設展示されている。ガラスのトンネル状の《光の橋》は、静かなサウンドと光に包まれる瞑想空間。ほかにも森のような巨大ジオラマ作品や巨大彫刻など、異世界が体感できる。

青森県十和田市西二番町 10-9

5月15日まで、写真展「地霊ー呼び覚ませしもの〜東川賞コレクションより〜」も開催。

towadaartcenter.com

(写真)

アナ・ラウラ・アラエズ《光の橋》© Mami Iwasaki

### ● ハラミュージアムアーク

#### 榛名山麓の自然と現代美術・古美術の共演

東京の原美術館の別館。《ミラールーム (かぼちゃ)》では、部屋全体がインスタレーション。小窓をのぞくと、黄色に黒の水玉のかぼちゃが万華鏡のように広がる。オリジナルは北欧巡回中の草間彌生展に出品のため、2017年1月までランタン型かぼちゃの特別バージョンで展示。ほかに、古美術展示室「観海庵」など散策が楽しめる。

群馬県渋川市金井 2855-1

3月12日～6月26日「女神たちの饗宴 原美術館コレクション展」ほかを開催。

www.haramuseum.or.jp

(写真)

草間彌生《ミラールーム (かぼちゃ)》1991/2015年 (スペシャル・バージョン)

え きんぐら  
 ● **絵金蔵**

**暗闇で見る、穴からのぞく、蔵の美術館**

「絵金」こと弘瀬金蔵は、贗作の冤罪で土佐藩の御用絵師の職を奪われ、町絵師となった江戸末期から明治の人物。現在は、彼が描いた芝居絵屏風を、元米蔵で公開している。当時に倣い、暗闇の中、<sup>ろうそく</sup>蠟燭を模した明かりで見る展示室「闇と絵金」のほか、穴からのぞき見る展示室「蔵の穴」などがある。

高知県香南市赤岡町本町 538

7月16日・17日 18:00～の絵金祭りでは、商店街に展示され、語りとともに蠟燭の明かりで鑑賞。屋台も並ぶ。

[www.ekingura.com](http://www.ekingura.com)

(写真)

展示室「闇と絵金」

● **金沢 21 世紀美術館**

**ここでしか体験できない！美術館まるごとアート**

妹島和世＋西沢立衛／SANAA 設計の開放的な美術館。世界の同時代の美術表現を紹介する企画展のほか、レアンドロ・エルリッヒの《スイミング・プール》など、建物と一体化した恒久展示作品も楽しめる。庭にある《カラー・アクティビティ・ハウス》では、中を歩くと風景の見え方が変わる。

石川県金沢市広坂 1-2-1

3月21日まで「生誕百年記念 井上有一」、4月～8月「西京人—西京は西京でない」ほかを開催。

[www.kanazawa21.jp](http://www.kanazawa21.jp)

(写真)

オラファー・エリアソン《カラー・アクティビティ・ハウス》2010年

©2010 Olafur Eliasson 金沢 21 世紀美術館蔵

写真＝木奥恵三 写真提供＝金沢 21 世紀美術館

にゅうぜんまちにぎやま

● **入善町下山芸術の森 発電所美術館**

**もと発電所の空間を生かした迫力のアート体験**

1926年築の煉瓦造りの水力発電所をリノベーションした美術館。多数のアーティストが天井高 10m 近い空間やタービンなどの遺構を生かして制作し、個性的な展覧会を行っている。現在開催中の、林泰彦と中野裕介のユニット「パラモデル」による、工業用資材で構築したインスタレーションなども圧巻だ。

富山県下新川郡入善町下山 364-1

3月13日まで「パラモデル展 パラ基準と変調」。3月26日～5月中旬「発電所美術館収蔵品展」ほかを開催。

[www.town.nyuzen.toyama.jp/cosmo/kyoiku/bunka/bijutsukan/bijutsukan/index.html](http://www.town.nyuzen.toyama.jp/cosmo/kyoiku/bunka/bijutsukan/bijutsukan/index.html)

(写真)

「パラモデル展 パラ基準と変調」展示風景

● **江戸東京たてもの園**

**古きよき日本へタイムトラベル**

東京の西、約 7ha もの広大な敷地に、歴史的・文化的価値の高い建築物、30 棟が建ち並ぶ。歴史に名を残す偉人の家からさまざまなジャンルの商店（文具屋、居酒屋に銭湯！）、さらには交番や農家までを都内各所から移築してきた。家を見れば、江戸～現代までの、人々の生活が見えてくる。

東京都小金井市桜町 3-7-1（都立小金井公園内）

Tel. 042-388-3300

[tatemonoen.jp/english](http://tatemonoen.jp/english)

(写真)

下町中通り © Edo-Tokyo Open Air Architectural Museum